

発達検診後のフォローアップ教室における母親支援の実践から

The effectiveness on mentalities and behaviors of parents and children through parenting program at the development well child visits

次世代教育学部こども発達学科

勝田麻津子

KATSUDA, Matsuko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：子育て支援, 早期発達支援, 母親サポート

はじめに

岡山県のA町では、1歳半検診で「発達が気になる子ども」や「子どもへの対応が気になる保護者」に向けて、担当保健師がフォローアップ教室への参加を促し、子育て支援をサポートする活動を10年継続して実施している。

筆者は、そのフォローアップ教室で母子への支援アドバイザーの関わりを3年間続けてきた。担当当初は、子どもの発達支援的な関わりへのアドバイスを中心にしてきたが、月1回開催のフォローアップ教室では、子どもサポート支援よりも、「母親への支援」へのプログラムに取り組むことが効果的ではないかと考えるようになった。

そこで、平成24年度は、担当スタッフとの年間計画の打ち合わせの段階で、子育て支援教室は「母親支援を中心に」との方針を確認し、母親が安心して参加でき、子どもや自分の成長を共に喜べるように、母親の気持ちに寄り添うことを大切にすることを目的としたプログラム計画を立てた。

本実践報告では、母親が安心できる人とのつながりの構築、母親が子どもの発達の見通しが持てるような子どもの理解へのサポートが「子育て力」の向上につながるなどの仮説から実践と調査に取り組んだ。

I. フォローアップ教室の活動について

1. 概要

- (1) 場所 岡山県A町
(保健センター集団指導室)
- (2) 対象

① 1歳6ヶ月児・2歳6ヶ月児検診において経過観察が必要となった親子

② 育児不安や育児困難感に陥っている親子

③ 不適切なかかわりから発育が阻害されている子どもとその親（ネグレクトの疑い含む）

④ 保護者の希望

(3) 実施内容

親子遊び（自由）・設定遊び・おやつ・親座談会・個別相談（発達検査を含む）

(4) スタッフ

① 県保健所保健師（1名）

親子の観察、全体の様子の観察、個別支援、会の運営、町保健師への支援（助言等）

② 町保健師（1～3名）

会の進行（司会・進行）、全体の様子観察、関係機関との連携調整、総括

③ 保育士（1名）

親子遊びの指導・支援、親子の行動観察、スタッフへの助言指導

④ 子育て支援センター保育士（2名）

親子遊びの誘導、母子分離後の子どもの遊びの誘導

⑤ 心理相談員（筆者担当）

親子の行動観察、個別相談、母親やスタッフへの助言指導

2. H24年度取り組み内容

- (1) 参加人数 親子 10組
- (2) 実施回数 年間10回
(5月～翌年2月まで毎月1回)
- (3) 実施目的

子どもの発達支援を中心とした取り組みから、母親支援に配慮したプログラム作りを企画し、母親の行動や感情が、好ましい方向に変容することで子どもの成長を支えることを目的とする。

具体的には、以下の取り組みをする。

- 1) 母親グループの懇談会を毎回40分程度で実施するプログラムを作る。
- 2) 母親が記入するノートを作成し、スタッフと母親との交流を図る。
(心理相談員・保育士が母親へのコメントをノートに記載 等)
- 3) スタッフの状報交換を会の途中で適宜実施する。
- 4) 適宜、母親との個別相談の時間を設ける。
- 5) STAI (状態・特性不安検査) で不安軽減を測定する。

II. 1年の活動の振り返り

1. 参加前後のアンケート結果

参加10人の母親アンケートは以下の結果であった。

(1) 「参加の動機」について (重複回答)

参加前では約7割が「子育ての悩み」があり、続いて「知識の習得」や「対応について知りたい」が多い。参加後の同様のアンケートでは「知識の習得」「子どもとの楽しい時間」が約7割、続いて6割が「特性を知りたい」と答えた。

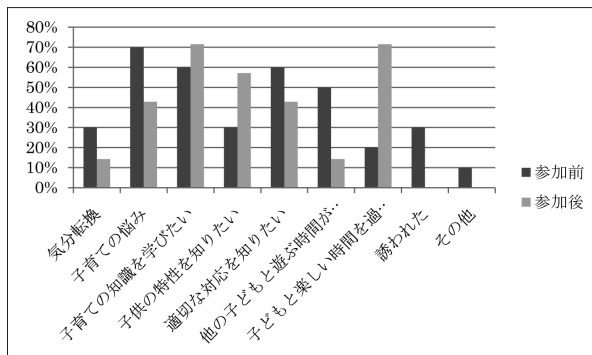


図1 参加の動機

(2) 日々のストレスについて

日々のストレスを「やや感じる」人と「とても感じる」人をあわせて参加前は8割以上であったが、参加後には3割の人となっている。

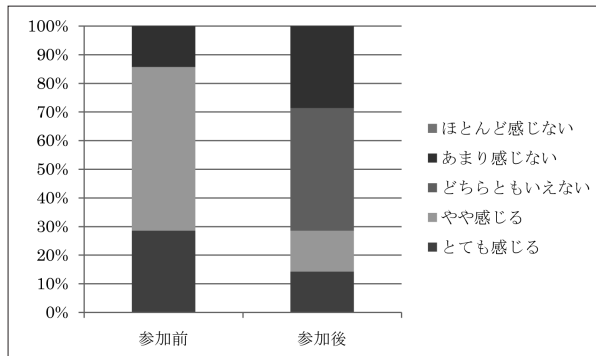


図2 日々のストレスを感じる

(3) 教室参加にして変化したこと

- 1) 子どもをしかること
増えた1 減った6 変わらない0
- 2) 子どもをほめること
増えた7 減った0 変わらない0
- 3) 子どものことでイライラすること
増えた1 減った4 変わらない2
- 4) 子どもと遊ぶ
増えた5 減った0 変わらない2
- 5) 子どものことを家族ではなす
増えた4 減った0 変わらない3
- 6) 子育ての悩みを話す
増えた4 変わらない3
- 7) 子育てに自信がもてるようになった
なった6 ならない2 分からない2
- 8) 子どもの様子や行動の変化
あった6 分からない1
- 9) 集団の中での子どもの様子が分かった
よく分かった5 少し分かった2
- 10) 毎回参加するのは 楽しみだった7

2. <初回→最終回>の親子の変容

3. <初回→最終回>STAIの状態・特性不安数値の変化

2.3の結果を表1にまとめる。

表1 親子の変容とSTAIの状態・特性不安数値の変化

		初 回	最 終 回	STAI(状態不安)	STAI(特性不安)
1	親(24)	思い通りにならない子どもを怒鳴る	怒ってばかりの自分を反省する	39 → 39	53 → 42
	男子(2)	多動、表情が無い	笑顔で会話が増える		
2	親(30)	兄弟が障害があり育児不安	なんとかやっけていけそう	24 → 33	59 → 56
	男子(1歳半)	表情が出にくい	にこにこ笑顔がでる		
3	親(30)	自分の時間がなくイライラ	気持ちに余裕ができた	55 → 22	56 → 48
	女子(3歳)	無表情	言葉が増えて、笑顔が出る		
4	親(32)	マイペースで子どもより自分の生活優先	子どもの様子を気遣うようになる	32 → 22	44 → 35
	女子(2歳)	多動、表情が無い	多動、言葉が増える		
5	親(35)	子育てがストレス、かわいくない	愛おしく感じる、子どもの気持ちがわかる	39 → 39	53 → 42
	男子(2歳)	こだわりが強く、他児に攻撃的	言葉が増えて、落ちつく		
6	親(26)	発達が遅れているので心配	子どもの対応がわかってきた	46 → 46	37 → 37
	男子(2歳)	言葉のやり取りができない	意志の疎通ができるようになる		
7	親(26)	子どもの対応がうまく出来ない	落ちついて子どもの対応ができる	31 → 41	37 → 36
	男子(2歳)	言葉が少なく、一人で遊ぶ	母親への言葉がけがでる		
8	親(32)	子どもの対応がうまく出来ない	余裕ができて、気持ちが理解できるように	46 → 37	44 → 35
	女子(2歳)	他児との交流がしにくい	感情にムラがあるが、一緒に遊べる		
9	親(40)	子どもの発達が心配、かたくなな様子	表情が明るく、子どもの気持ちを汲み取る	31 → 26	44 → 35
	男子(2歳)	表情が無く、言葉が出ない	単語が出る、笑顔で対応できる		
10	親(28)	イライラして感情のコントロールが苦手	自分に少し自信がもてるようになる	59 → 50	75 → 59
	子(2歳)	多動、表情が出ない	言葉が出る、感情の起伏が激しくなる		

4. 保護者の終了後の感想（聞き取りと自由記述）

(1) 自由記述から

○ほとんど家にいるので、人と遊ぶことがない時もあるので教室があると助かります。子育ての悩みも相談できるし、参加して良かったです。

○お兄ちゃんの時から3年間、本当にお世話になりました。毎回とっても楽しみに通わせて頂いていました。先生の話聞いて思わず涙があふれたこともありましたが、なかなか自分をほめてもらえることもなく、子育てが辛いと思ってしまうようになっていましたが、先生の言葉で一気に気持ちが楽になりました。この教室を卒業するのはとっても寂しいです。まだまだ勉強させていたきたい気持ちが一杯です。

○子どもがというより、私が成長できました。いろんな意見を聞くことで、自分が楽になったし、「こうしないと！」と頑張りすぎる事が減ったと思います。子どもが自分の思い通りにならない事にイライラし、「他の子は…」と比べてしまう自分から早く脱出できて、子どもはゲンと大きくなりました。今では何で悩んでいたんだろう…と笑ってきますが。親子で成長できて、本当に感謝しています。ありがとうございました。そしてこの素敵な場所をこれからも続けてほしいと思います。

○半年間、大変お世話になりました。4月から子どもは保育園、私は職場復帰、引っ越し…と環境は変わりますが、毎日一つずつ出来ることを大事にして、1日の中での親子の時間を大切にします。ありがとうございました。

○いつも具体的なアドバイスを頂いて実践していくうちに、ずいぶんイライラすることもなくなりました。

○家にいたり他の子と比べてばかりでは、自分の子どもの成長の度合いが分かりにくいので、こうやってじっくり様子をみてもらったり、相談できる機会があると有難いです。他の育児相談では自信がなくなるような事を言われましたが、ここでは前向きになれる言葉をたくさんいただき、また頑張ろうと思えます。

(2) 保健師の聞き取りから

【質問1】教室参加をしてみてもいいでしょうか？

○来ると気持ちがすごく楽になった。最初の頃は、次の教室までに子育てで毎日困ることが多くて、「早く話がききたいのにな…」と思っていた。次第に、1ヵ月経って来たら、「あっ、こんなこと思わなくてよかったんだ」と、すごく気が楽になることが多かった。

お兄ちゃんのことをすごく悩み心配だったから、「どうなんかなあ、できるんかあ、できんのかなあ」と

思っていたので、『大丈夫ですよ』と先生が言ってくると安心できた。来てよかったとすごく思いました。

○相談できる先生がいて、こっちも分からない分助けてもらえる言葉をももらえるから やっぱり頑張れる気になる。主人とだけで話すといけないし、ここにきて先生には話してみて「間違ってたなあ」と。「これ教えてもらったなあ」って思うことがいっぱいあって、やっぱり親にもいえんことが先生に言えるみたいな。聞いてもらってよかった。

○発達の段階とか言ってくれるので、「あっ、そうじゃな」って。子どもの様子を話をして、友達と話をすると「腹が立つよなあ〜」で終わっていることも、なんで腹が立つのか「あっ、そうじゃな」と分析してくれるから、すっきりする。

○やりやすく、すぐできることをいってくれるから、「じゃあやってみよう」と思った。やるべきことのハードルが高くないから「出来そう」って思う。

○最初は子どもの言葉がちょっと遅かったからというので、保健師さんから教室の声をかけてもらったが、「教室」って何をするのかと思っていた。こんなにリラックスして、なんでも話せて…という感じでなく、勉強という感じかと思っていた。来だしたら子どもたちにとっても楽しみで、お兄ちゃんにも「今日役場に行く日なんよ」というと「いいなあ行きたいなあ」と言っていた。子どもが苦手ないちごも教室で食べられるようになったりして。

なかなか「こういうので困っている」ということを話す場がなかったので、いろんな人の話がきけてよかった。子どもが成長しても私だけでも来たいくらい。

【質問2】 教室の構成についてはいかがでしょうか？

○よかったと思う。子どもと月1回集まり、安心して来れてたし、理解もしているからよかったと思う。

○この感じが良かった。聞けるし、話もできて、子どもと遊ぶ時間もあって、お母さん同士の会話もでき、いろんな情報を得ることができた。子どもを見ながら話もできて、ゆっくりできる時間もあったからリラックスしながらできた。

○最初自分の話を「ばっ」と聞いてもらえるし、とにかく全く知り合いではなくて客観的に聞いてもらえる保健師さんや先生に自分の気持ちを「ばっ」と言うだけでもとりあえずすっきりした。

あと、座談会ではよそのお母さんがどんな悩みもっているか「ああ、私も、私も」とみたいに共感できたり、「こういう時はどうしようか」とか、先輩お母さんの話をゆっくり時間をとってきける機会がよかった。普通にアパートで2人で暮らしていたら、核家族で暮らしてみても、結構そういうところがしんどかったから。誰かにおってほしいのに、だれも言う人がいないみたいな。友達も忙しいし親とかも仕事をしているし。そんな時にこんな会が定期的にあって「すごいいなあ」と思っている。

○「教室」に参加できてよかった。自分が家の中だけにいたら、狭い方に考えだして、ほんとはかわいいけれど、子どもにも腹がたってかわいいとは思えないとか、ただイライラしたりとか…。個別に先生に1回だけ話を聞いてもらえたが、1年に2回くらいそんな個別相談の機会があればうれしいと思った。

○始めの時は、とりあえず聞いてもらえる、聞いたことに対してすごいほめてくれて、それだけで、なんか頑張れたのかなって、ちょっと勇気ももらった。「私、ちゃんと子どもとかかわれたな」といい気持ちになりながら、「ああまた頑張れそうな気がする」という気持ちになりつつ、ここでみんなの話がきけて、「ああそんな時もあったな」という情報交換にもなったし、先生との個別の時はプライベートなこととか、この場でいいにくいことも聞けるし、分量的にはいいくらいではないかと思う。

【質問3】 最初に参加した時の気持ちと今の気持ちを振り返って「自分の子育て」で、「私成長したな!」と思えることはありますか？

○人見知りがなくなった。初めと今では違う。みんなが話かけてくれたりして、その会話ができるようになって、自分もきいてみようかな…と思い、だんだんと馴染めてきて、人見知りがなくなったんだと思う。

○おにいちゃんのトイレのことで、すごい悩んでいたから、そのアドバイスが自信になった。言葉をかけてもらった分楽になった。すごい怒っていたからそれを怒らんようになった。でもほんとその間だけだけ

ど。「怒らないようにしよう」と、ここに来て気づかされた。「そうゆうふうにしたらいいなだ」と思えた。

【質問4】 教室をお勧めしたいですか？

○もし子育てに悩んでいる人がいたら、「この教室に行っとったんよ」と言ってあげられる。

○他人としゃべらん友達がいる。こんなところで話をしたほうが、素直聞けそう。素直に言えそう。変になんか知ってる人だと言にくいこともあるのかも。

○他人としゃべらん人は来た方がいいよね。他人に話して会話を合わせて疲れるよりは、ここで話をしたほうがいい。

○自分が全然違ったから来させてもらってよかったとすすめる。

【質問5】 日々生活での気持ちはいかがでしょうか？

○行ってなかったらすごい爆発していた。「いいかげんにせられ〜」と子どもにすごい言っていたと思う。

○自分の子って感情がむっちゃ出るんだなと思った。

○怒る日も日もあるけれど、ふと思い出すと大丈夫な日もあることに気づいた。

○怒ってしまう日もあるけど、自分が落ちついて大丈夫な日は、「あっ抑えておさえて」って思うようになった。

○「あっ、前あのお母さんらがよーたことと一緒にじゃ」と思うたら、「あのお母さんに、先生よーたよな」と思うと、人の話も「聞いていてよかった」とも思う。そんな時は悩んでなくても、人の話を聞けるのもよかった。

【質問6】 記録ノートの感想をお聞かせ下さい

○これがあつたから、帰ってどんなこといわれたかなとか「あつこういふことしようかな」というのがあつたから。記録は負担ではなく、それは大丈夫だった。

○忙しい時は「わっ、たいへん！」と思ったが、記録が記念になるから「書いとこう」と思った。

○出てこんよね。一杯いっぱいだから、文章にならなかった時もあった。単語ひとつだけ書くこともあった。

Ⅲ. 考 察

1. 母子支援に効果的な支援プログラム作りについて

(1) 母親支援の取り組みとして、以下の取り組みが母親から「うれしかった」「安心できた」との声が高く、効果的であった。

- 1) 母親の労をねぎらう
- 2) 母親同士の「語らいの場」を設定
- 3) 日常生活で実践できる内容の、簡単に実践できる具体的な子育てアドバイス
- 4) 楽しく、気軽に記入できる「参加者ノート」
- 5) スタッフが「参加者ノート」にコメント記載
- 6) スタッフみんなが母親に声をかける

(2) 親子を完全に分離しない「活動内容の場」を設定した工夫は、母親の安心感につながるだけでなく、スタッフが母子関係を観察できる「場」にもなり母子支援に効果的であった。

- 1) 保健師が母子の遊びに添いながら「聞き取り」を行う
- 2) 保育士による「はじまりの会」「設定活動」「おやつ時間」は母子参加
- 3) 「母親ミーティング」は子どもが遊ぶ部屋の一角で実施

2. 母子支援に効果的なスタッフ連携方法

以下の取り組みは、母子の課題を明確にし、毎回の活動の充実に向けて、効果的であった。

(1) 「1) 保健師が母子の遊びに添いながら『聞き取り』を行う」その後、母親から語られた内容の中で、スタッフが共通で理解しておいた方が望ましい内容については、会の「設定活動」が始まるまでに、短時間で連携をとり共通理解を目指す。そして、「母親ミーティング」でサポートできる内容であれば、その日の会で内容を取り上げる。

(2) スタッフミーティングの内容を明確にする

- 1) 母子の現在の状況と今後の課題確認
- 2) 毎回の「母親のチャレンジ内容」の確認

(その後、次会までに他の健診等で母親と出会う機会のあるスタッフはさりげなく激励をする)

まとめ

本実践報告では、母親が安心できる人とのつながりの構築、子どもの発達の見通しが持てる子どもの理解が「子育て力」の向上につながる、との仮説から実践と調査に取り組んだ。その実践活動の中で母親の気質・生活環境等をふまえたグルーピングが重要であるということもわかった。

今後の課題としては、①母親グループの中で、母親の課題が多様化してくること、②1歳6カ月児・2歳6ヶ月児検診後のフォローアップ教室との位置づけで、「子どもの発達に問題があり、育てにくさを感じている親」が対象であったが、③子どもよりも「親自身が何らかの問題を抱えている」ケースが増えてきた場合のプログラムの検討、が挙げられる。

さらに、本実践の継続を分析をとおして「母親の変化」とそれに伴う「子どもの変化」、「母子関係の変化」に効果的なプログラム内容の検討を進めていきたい。

引用参考文献

- 伊藤順一郎「地域精神保健活動における介入の在り方に関する研究」(厚生労働科学研究費補助金事業／こころの科学研究事業, 2003)
- 内田伸子 (1998). 『まごころの保育－堀合文子のことばと実践に学ぶ－』小学館.
- 内田伸子 (1996). 『想像力－創造の泉をさぐる－』講談社.
- 内田伸子 (1999). 『発達心理学－ことばの獲得と教育－』岩波書店.
- 内田伸子 (2008a). 『よくわかる乳幼児心理学』ミネルヴァ書房.
- 内田伸子 (2008b). 『幼児心理学への招待－子どもの世界づくり－』サイエンス社.
- 内田伸子 (2008c). 『子育てに「もう遅い」はありません』成美堂出版.
- 内田伸子 (2009). 「幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響－日韓中越蒙国際比較－」『グローバルCOEプログラム国際格差班プロジェクト研究成果報告書』.
- 「10代・20代を中心とした『ひきこもり』をめぐる地域精神保健活動のガイドライン」(国立精神・神経センター障害保険福祉総合研究事業, 2003)
- 小此木啓吾「ひきこもりの社会的背景」狩野力八郎・近藤直司編『青年のひきこもり：社会心的背景・病

理・治療援助』(岩崎学術出版, 2000)

カミイ, C.・デブリーズ, R. (1973). 稲垣佳世子 (訳) (1980). 『ピアジェ理論と幼児教育』チャイルド本社.

小枝達也「5歳児健診」(診断と治療社, 2008)

齊藤万比古「不登校の児童・思春期の精神医学」(金剛出版, 2000)

齊藤 環「ひきこもりと社会」『現代のエスプリ』(至文堂, 2006)

高橋金三郎 (1962). 『授業と科学』麦書房.

滝川一廣「社会, 家族, そして精神療法」『精神療法』(1999)

芳川玲子「ひきこもりカウンセリングの実際」『現代のエスプリ』(至文堂, 2006)